

【研究ノート】

GSC 留学学習効果測定調査の目的と調査設計 —日本人学部生の異文化能力開発ケーススタディ—

平 塚 広 義
小 堀 真
橋 本 彩 花

はじめに

現在日本において「グローバル人材育成」が急務であることは、政界や経済界を問わず長年認識されてきた。また、将来の人材育成の一端を担う大学教育では、多くの国内大学が、海外留学を「グローバル人材育成」の重要な教育活動と位置付けている。日本人学生が「文化の違い」を乗り越えるための知識とスキルを身につけることは、日本社会の文化多様性の創造に貢献する可能性がある。そして、そのような人材の育成は、グローバルな課題に対する解決策を模索する上でも、そして近年飛躍的な経済成長を遂げるアジア諸国との外交的協力関係を築く上でも必要である。このような国内の大学教育の背景から、地球社会共生部（The School of Global Studies and Collaboration、以下 GSC）は、青山学院大学で唯一、海外留学を必修としたグローバル系学部として 2015 年に設立された（平澤 2018）。本稿の目的は、以上のような背景から、GSC のカリキュラムの核となっている東南アジア留学プログラムの学習効果測定調査の全容を共有し、研究デザインとこれまでの調査設計の経緯を検証した上で、今後の展望について報告することである。

国際教育の文脈：これまでの国内での政策的議論の背景

大学教育における日本人のグローバル人材育成政策は、海外留学がその中核となる役割を担ってきた（平澤 2018）。そして日本政府は、大学に対し海外留学を含めたグローバル人材の育成などの国際化政策を実施してきた（平澤 2018）。それは、一つには、日本人の国際的なキャリアとグローバル人材育成の指針である「国連を含む国際機関での日本国籍職員数」の増員を目指すという背景があったためである。しかし、それにも関わらず、国連事務局職員における日本人国籍保持者数は、近年においても出資額に相当する数を確保できていない（平澤 2018; 横山 2011）。もちろん海外留学の政策的成果は多様でありうるが、仮に国際機関での日本国籍職員数を大学教育上のグローバル人材育成の一つの指標とした場合、これまでの海外留学プログラムは、想定通りの貢献ができていないということになる。このような現状を鑑みると、果たしてこれまで日本政府が策定してきたグローバル人材育成のための海外留学政策や関連施策が当初の目的通りに機能してきたのかという疑問を持たざるを得ない。

このような状況に対し、日本政府も 1990 年代を境に減少している日本人の海外留学を再度拡大するため、希望する学生に対して奨学金を出資する政策を実施しているが（MEXT 2017）、いくつかの課題が未解決のままである。例えば、政府関係者、大学教育研究者、そして大学行政の実務家の間で、「海外留学」への参加が「グローバル人材の育成」という目標を自動的に達成する、という前提が、明確な根拠もなく存在している可能性がある。また、参加人数の拡大自体が前提であったため、海外留学の「質」が改めて検討されてこなかったことも指摘できる¹。このような課題が残されたままであるのは、日本政府の大学国際化政策や国内大学の留学プログラムでは、十分な情報を踏まえた意思決定に基づいた取り組みがなされてこなかったからではないだろうか。そこで、本研究では、大学教育における海外留学を、「量」の視点から「質」の視点に移し、改めて見直すことに重点を置く。

先行研究

以上のように、これまで日本の国内大学の留学関係者の間では、学生の留学プログラム参加はグローバル人材育成に直結しているという推測から、その参加人数を増加するべき、という導入重視型の議論を前提としていた。そのため、どのような留学プログラムがグローバル人材を育成しうるのかという、その学習効果に着目した成果重視型の議論は必ずしも盛んに行われてこなかった。しかし、これからの留学プログラムの研究は、成果重視型の視点に立って検討することも必要であろう。そこで、ここでは、グローバル人材が育成されたかどうかの測定方法を含め、これまでどのような研究が進められてきたのか、いくつかの課題から先行研究を総合的に議論する。

第一に、日本での留学の学習効果を証明する研究やデータ収集は必ずしも活発に行われてきたわけではない（Hanada 2015; 花田 2018; 新見 2018）。第二に、留学渡航先の多くは北米または英語圏の大学となっており、東南アジアを含めた英語圏外の留学に関する研究は限られている。なぜこのような傾向になったかはさまざまな理由が想定できるが、現在ある国内の文献を見ても、この傾向ははっきりしている。例えば、横田ら（2018）が実施したアンケート調査では、学部生の単位修得型留学²の参加者は 741 人となっているが、その内訳を見ると、74.6% (n=553) が北米を含めた英語圏、次に EU の非英語圏が 10.1% (n=75)、中国・韓国・台湾が 11.6% (n=86) であり、東南アジアへ渡航した学生の記述はない³。Ward ら（1998）の研究においても、渡航先はニュージーランドであり、オセアニアの英語圏となっている。つまり、英語圏外への留学に関する研究が非常に限られているというのが現状である。第三に、研究手法の課題が指摘されている（花田 2018; 小林 2018; 新見 2018 など）。学部生の単位修得型留学の学習効果測定に限れば、定性的な方法での研究（松下 2007; 森下 2016; 高橋ら 2018 など）が主流である。定量的な研究は、限られた数の論文発表（横田ら 2018; Ward ら 1998; Ward ら 2001 など）にとどまり、混合手法の研究はさらに限られるという批判（花田 2018; 小林 2018; 新見 2018 など）⁴もある。第四に、異文化教育・社会心理学の枠組みでの「学生の能力育成」からの視点で

の研究は非常に少なく、また、そのようなデータの収集や測定尺度の開発も国内では限られている。例えば、英語圏ではコミュニケーション研究からのアプローチが主流である (Berg ら 2012; Bennett 1986; Hammer 2012 など)。他方日本では、理論主導的な妥当性と信頼性の枠組みに基づいた実証研究はさらに限られており、異文化教育分野の理論的な議論に留まる (新井 1997; 松尾他 2018; 塘 2017 など)。このように、日本国内の大学の留学プログラム関する先行研究を見る限り、現時点ではプログラム自体の教育的な質やその学習効果を批判的に分析している研究が多く行われているとはいえ、学術的に未解決な課題が積み残されている。

これらの学術的に未解決な課題を踏まえ、本研究では、GSC 学部生を対象とした東南アジア留学プログラムを通した異文化体験の学習効果を評価することを目的とし、かつ、定量的・混合手法的な方法を用いた実証分析を行うことを目指したい。そこで、本研究は、留学学習効果の評価測定に、異文化能力 (Intercultural Competence) (Deardorff 2004, 2006; Fantini 2000; Ward & Kennedy 1999 など) の概念を用い、以下の仮説を検証するべく調査設計を進めることとする。

[H] 海外留学プログラムへの参加が「異文化能力の育成⁵」をもたらす

しかし同時に、先行研究でも浮き彫りになったように、そもそもこの仮説の妥当性を実証した調査や研究の蓄積は極めて貧弱である。本研究ではこのような現状を踏まえ、上記の仮説を検証するための適切な尺度の選定、研究手法のデザイン、そしてそれらに基づいたエビデンスの蓄積をその目標とする。我々の本研究に関わる学術的な観察、方法論的考察、実務経験は、冒頭で指摘したような、現在日本の大学が直面している政策としての大学教育の国際化と留学プログラムの諸課題の解決に貢献しうるのであろう。

GSC における基礎概念と課題

社会科学分野の学部生の単位修得型留学は、自然科学における実験演習の位置付けに等しいとされている（Sommer 2002）。また、海外留学で提供される渡航先文化での実体験は、大学教育のカリキュラムに統合され、学部ミッションやディプロマポリシーに連動した形で構築されなければならない。そして、海外留学プログラムにおける学生の学習活動は、渡航先文化での社会適応能力・認知適応能力を育成し、自文化の客観的視点を養うことを念頭におくべきである。本学部の留学プログラムは、これらの要素を考慮し、異文化能力の育成を通じたグローバル人材育成に貢献しなければならない。

ところで、教育理論上、学習と経験は密接な関係がある。そのため学習と経験は、両方を切り離して議論することはできず、一つの経験が次への経験と繋がっているといたった連続性が存在する。しかし、一連の学習経験は、必ずしも学習効果に寄与するという保証はなく、ときに学習経験は間違った学習へ繋がることもありうる（Dewey 1938）。Kolb（1984）は、経験から起こる学習は4つの様式（Four Modes）から成り立っており、これらの4つの様式－実体験・振り返り・概念化・応用－を通じた葛藤や統合から学習が達成されると提唱した（図1）。そして我々は、この学習理論が、留学という学習方法にも応用することが可能であり、本学部プログラムの概念的枠組みとして利用できると考えた。

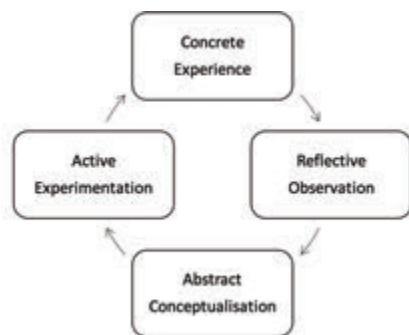


図1 Experiential Learning Cycle (Kolb 1984)

本学部留学プログラムのロジックモデル構築

学部留学デザインの基礎設計・詳細は、平澤（2018）に記載されているので、そちらを参照されたい。しかし、本研究の対象である GSC の留学制度における学習効果測定を検討を進めるにあたり、本学部の留学プログラムがどのようにデザインされたのかを改めて確認しておきたい。本学部の留学プログラムのデザインにおいて重要であったのは、「留学経験によって、学習者がプログラム実施主体の期待する学習効果を得られるようになっているか」という点であり、そのためには経験を適切な学習へと接続させるシステムが必要であった。そこで、Experiential Learning Theory（Kolb 1984）－実体験とこれを通じた葛藤や統合から学習が達成されるとする学習理論－に基づき、ベースとなるプログラムが構想された。他方、これまでの留学におけるカリキュラム構造の問題点は、「学習者（学生）」と「カリキュラム」、「指導教員・支援職員」の間に物理的・時間的隔たりがある中でしか学習効果を測ることができない点にあった。そもそも学習効果の実証研究・評価の例は国内に限られており、多くの場合学習者本人の体験談に偏っている。国内研究事例では、「文化学習」の質的分析が数件発表されているのみである。なお、米国では、学習者は学部の教育目標の枠組みの中で設定された学習目標に向けて、現状を改善する必要があると考えられている。例えば Berg ら（2012）の量的手法による検証分析では、学習者が独立して学習活動ができるようにすると同時に、学習者の学習プロセスを手助けする「学習コーチ」の支援が加わるよう、留学プログラムをデザインすることが必要であると提案している。ただし、日本人学生を対象とした同様の研究事例（Hanada 2015; 花田 2019; Ward ら 1998 など）は事例数が限られているため、日本国内の高等教育研究への応用実施の可能性は未知数である。

そこで、これらの課題を解決するために、文脈に合わせた留学プログラムの研究教育プラットフォーム・学習環境・指導方法・評価ツールを用意し、本学部の留学プログラムに組み込むこととした。以上のように、これまでの学部設立に至るまでの経緯と実際の留学プログラム運営を踏まえ、一連のプロセスを概念化し、本研究の研究デザイン＝ロジックモデルとして示したものが表 1 で

ある⁶。

表1 GSC における留学のロジックモデル

experiential learning 学習段階 留学段階（局面）	concrete experience 留学体験 留学中	reflective observation 留学体験の振り返り 留学直後	abstract conceptualisation 留学体験の内面化 留学後の学び	active experimentation 留学体験の効果 卒業後
事前準備 留学前の学び	留学体験 留学中	留学体験の振り返り 留学直後	留学体験の内面化 留学後の学び	留学体験の効果 卒業後
教育内容・目標	・海外生活の準備 ・語学力の強化 ・異文化理解の涵養 ・フィールドワーク 技術の習得	・派遣先大学講義 ・渡航先での生活体験 ・フィールドワーク実践 (GSC 教員による遠隔指導)	・帰国レポートの作成 ・フィールドワーク レポートの作成	・ゼミにおける学習へのフィードバック ・価値観の変容 (異文化理解能力の向上) ・語学力の向上
留学学習効果測定	SCAS 調査		SCAS 調査	

研究方法

以上のように、本研究はある意味で GSC の構想段階から実質的に開始しているともいえるが、ここでは以下、実際の調査実施における（1）具体的な調査対象、（2）留学学習効果測定尺度、（3）その他の調査項目、について述べる。

（1）本研究の調査対象

原則として GSC に所属する全ての学部生⁷を対象に行う。本学部生は原則としてタイまたはマレーシアを中心とする派遣先大学への留学が必修とされている⁸。

（2）留学学習効果測定の尺度作成

本研究では、留学学習効果を測定するための適切な尺度の検討から着手した。それは、日本国内においてはそもそも GSC の留学プログラムの評価に適当な尺度が存在しなかったからである。

まず、GSC の留学プログラムにより「グローバル人材の育成」という目標がどの程度達成されるのかを計量的に検証するためには、「グローバル人材」の三つの要素である以下の項目を測定できる尺度を用意せねばならない⁹。

1. 語学・コミュニケーション能力
2. 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

3. 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

これらの尺度を用いて留学前と留学後に学生に対し留学学習効果測定を行い、前述の要素の変化を確認する必要がある。本研究では、英語と日本語の文献の先行研究から、本研究に採用できる可能性のある尺度を検証した。英語の研究では、約 50 の尺度が存在することがわかった (Fantini 2009; Paige & Stallman 2007)。その中には日本語で実施できる Intercultural Development Inventory (IDI) (Hammer 2012) や Cross-Cultural Adaptation Inventory (CCAI) (Kelley & Meyers 1995) など存在したが、1. 本学部が開設された 2015 年時点において日本人サンプルの実施が限定されていること、2. 費用がかかること、を考慮すると、本学部での留学プログラムの文脈では妥当性・信頼性を欠くと判断し、採用を見送ることとした。日本語での研究では、2つの尺度の存在を確認したが、そのうち入手可能なものはガウランと西田 (1996) の尺度のみであった。また、これらの尺度は多くが英語で作成されており、まず翻訳をする必要があった¹⁰。

上記の先行研究から、我々は本研究の評価尺度として、WardとKennedy(1999)が開発した Sociocultural Adaptation Scale (以下 SCAS) を選定し (表 2)、本研究のために独自に日本語化した SCAS を作成した^{11,12}。WardとKennedy(1999)によれば、SCASに基づき実施される研究で実際に利用される項目は、全 41 項目中、20 項目から 25 項目であるとしている。そこで本研究では、その中から 25 項目を選定し、日英翻訳を行った。回答選択肢には、5 件法¹³のリッカードスケールを採用した。

表2 SCAS オリジナル質問項目 (Ward & Kennedy 1999:663)

SCAS 質問項目	
1	Making friends
2	Using the transport system
3	Making yourself understood
4	Getting used to the pace of life
5	Going shopping
6	Going to social events/gatherings/functions
7	Worshipping in your usual way
8	Talking about yourself with others
9	Understanding jokes and humor
10	Dealing with someone who is unpleasant/cross/aggressive
11	Getting used to the local food/finding food you enjoy
12	Following rules and regulations
13	Dealing with people in authority
14	Dealing with the bureaucracy
15	Making yourself understood
16	Adapting to local accommodation
17	Communicating with people of a different ethnic group
18	Relating to members of the opposite sex
19	Dealing with unsatisfactory service
20	Finding your way around
21	Dealing with the climate
22	Dealing with people staring at you
23	Going to coffee shops/ food stalls/restaurants/fast food outlets
24	Understanding the local accent/language
25	Living away from family members overseas/independently from your parents
26	Adapting to local etiquette
27	Getting used to the population density
28	Relating to older people
29	Dealing with people of higher status
30	Understanding what is required of you at university
31	Coping with academic work
32	Dealing with foreign staff at the university
33	Expressing your ideas in class
34	Living with your host family
35	Accepting /understanding the local political system
36	Understanding the locals' world view
37	Taking a local perspective on the culture
38	Understanding the local value system
39	Seeing things from the locals' point of view
40	Understanding cultural differences
41	Being able to see two sides of an intercultural issue

SCAS の日本語化に際して、日本人大学生を対象とした研究が実施されていたことは確認できたが (Ward ら 1998)、その文献からは日本語化された質問票は入手できなかった。そこで、再度日本語化するにあたり、TRAPD モデルチームベース翻訳 (TRAPD model: team-based translation (Translation, Review, Adjudication, Pretesting, and Documentation)) (Mohler ら 2016) を採用した。翻訳チームには、日本語話者 1 人、日英語話者 2 人、外部日本語話者 1 人が翻訳を実施した。また、2016 年に質問票のパイロットサーベイを実施¹⁴した。このような作業を経て作成した GSC 版 SCAS が表 3 である。

表 3 SCAS 日英質問対応票

英語	日本語
Making friends (1)	友達を作る
Making yourself understood (3)	自分の意思を理解してもらう
Talking about yourself with others (8)	自分を表現する
Understanding jokes and humor (9)	ジョークやユーモアを理解する
Dealing with someone who is unpleasant/cross/aggressive (10)	不快な行動をとるような人に対処する
Dealing with people in authority (13)	権威のある地位にいる人たちに対処する
Dealing with the bureaucracy (14)	お役所的な応対に対処する
Communicating with people of a different ethnic group (17)	異なった民族グループの人たちとコミュニケーションをとる
Relating to members of the opposite sex (18)	異性の人たちに共感する
Dealing with unsatisfactory services (19)	大学・公共機関での満足のいかないサービスに対処する
Dealing with people staring at you (22)	物珍しげな視線に対処する
Understanding the local accent/language (24)	現地特有のアクセント・言語を理解する
Relating to older people (28)	年長の人たちに共感する
Dealing with people of higher status (29)	社会的な地位が高い人たちに対処する
Understanding what is required of you at university (30)	何が大学で要求されているか理解する
Coping with academic work (31)	学業をこなす
Dealing with foreign staff at the university (32)	現地の大学のスタッフと意思疎通をはかる
Expressing your ideas in class (33)	授業で意見を述べる
Accepting/understanding the local political system (35)	現地の政治システムを受け入れる・理解する
Understanding the locals' world view (36)	現地の人たちの世界観を理解する
Taking a local perspective on the culture (37)	現地の人たちと同じ文化的視点をもつ
Understanding the local value system (38)	現地の価値観を理解する
Seeing things from the locals' point of view (39)	現地の人たちの視点で物事をみる
Understanding "Cultural Differences" (40)	「文化の違い」を理解する
Being able to see two sides of an intercultural issue (41)	異文化問題を両側面からみる

※括弧内は英語オリジナルの質問番号を示す (Ward & Kennedy 1999:663)

無断転載禁止。

(3) その他の調査項目

本調査において核となる質問項目は GSC 版 SCAS であるが、その他にも、主に日本版総合社会調査 (Japanese General Social Surveys、以下 JGSS) から許可を

得て採用した質問項目や、権威主義的態度の測定項目、語学運用能力を尋ねる項目を採用している。また、データ分析の幅を広げるために、本研究では質問票の最後に自由回答項目を設定し、対象者に記入してもらうことも試みた¹⁵。

i 外国人受け入れ意識（大学）

いくつかの国や地域を示した上で、それらの国・地域出身の外国人を大学に受け入れることができるかどうかを尋ねている。この項目は EASS2008 文化モジュール /JGSS-2008B 票 12 頁 Q53 を参照して作成しており、元の質問が「同じ職場で働くこと」について尋ねているのに対し、この調査では「同じ大学で学ぶこと」に変更している。また、地域も今回の派遣先に合わせ変更している。回答選択肢については、2 件法であったものを 5 件法に変更している。

ii 外国人受け入れ意識（近隣）

いくつかの国や地域を示し、それらの国・地域出身の外国人を近隣に受け入れることができるかどうかを尋ねている。この項目は EASS2008 文化モジュール /JGSS-2008B 票 12 頁 Q54 を利用している。なお、前述の項目と同様、地域は今回の派遣先に合わせ変更している。回答選択肢については、2 件法であったものを 5 件法に変更している。

iii 国際問題の議論

国際問題について、家族や友人らとどの程度話すことがあるかを尋ねている。この項目は EASS2008 文化モジュール /JGSS-2008B 票 11 頁 Q49 を利用している。

iv 他国との関係

日本と他の国々との関係についてどうあるべきか、いくつかのトピックを挙げて尋ねている。この項目は EASS2008 文化モジュール /JGSS-2008B 13 頁 Q58 を利用している。

v 利己主義・利他主義

主に利己主義的な考え方・利他主義的な考え方に対する是非について尋ねたものである。これは多くの社会調査や心理学調査で用いられている権威主義的態度を測定する尺度の一部を用いている。

vi 語学運用能力

主観的な語学運用能力について尋ねた質問項目を採用している。具体的には英語と留学先の現地語におけるリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの各運用能力について尋ねている¹⁶。

vii 自由回答項目

学生自身にとって留学体験にどのような期待をしているのか（留学前調査）、そして実際にどのようなものであったのか（留学後調査）を尋ねる自由回答項目を設定している。これは留学前調査と留学後調査では質問文が若干異なっている（表4）。

表4 自由回答項目の質問文

調査	質問文
事前調査	今回の留学にあたって、あなたはどのようなことをお感じですか。どんな些細なことでも結構ですので、お書きください。
事後調査	今回の留学はあなたにとってどのような経験となりましたか。よかった点、悪かった点などを含め、どんな些細なことでも結構ですので、お書きください。

実際の調査経過および今後の調査計画と設計

(1) 調査経過

以上のような調査設計に基づき、2016年後期より実施されている留学プログラムに合わせ、留学効果測定を実施してきている。これまでに実施された調査をまとめたものが表5である。

表 5 調査経過（2015～2018 年度入学者実績）

	派遣学生入学年度	派遣時期	留学前調査時期	留学後調査時期	調査モード
第 1 回（1 次）	2015 年	2016 年度 1 次派遣	2016.7	2017.1	集合法
第 1 回（2 次）	2015 年	2016 年度 2 次派遣	2016.12	2017.6	集合法
第 2 回（1 次）	2016 年	2017 年度 1 次派遣	2017.7	2018.1	集合法
第 2 回（2 次）	2016 年	2017 年度 2 次派遣	2017.12	2018.6	集合法
第 3 回（1 次）	2017 年	2018 年度 1 次派遣	2018.7	2019.1	インターネットを用いた集合法
第 3 回（2 次）	2017 年	2018 年度 2 次派遣	2018.12	2019.6	インターネットを用いた集合法
第 4 回（1 次）	2018 年	2019 年度 1 次派遣	2019.7	2020.1	インターネットを用いた集合法
第 4 回（2 次）	2018 年	2019 年度 2 次派遣	2019.12	2020.6	インターネットを用いた集合法

※第 3 回・第 4 回調査では自由回答項目は不採用。

調査の時期であるが、留学前の調査は、出国の 2 週間から 4 週間前に行われる留学関連のオリエンテーションにて実施される。留学後の調査は帰国後の 2 週間から 4 週間の間に行われるオリエンテーションにて実施される¹⁷。

調査モードは、2017 年度 2 次派遣まではオリエンテーションに参加した学生に対し教室で質問票を配布し、回答をマークシートに記入するという集合法で行った。マークシートを用いたのは、回収原票からのデータ入力作業に割くことのできる人員・時間がともに非常に限られていたという事情による。これによりデータ入力に割く時間を大幅に短縮することが可能となったが、依然としてマークシートの読み込みエラーや学生の誤記入がしばしばみられ、データクリーニングにかなりの時間を必要とした¹⁸。このため、2018 年度 1 次派遣からはインターネットを用いての調査に切り替えている¹⁹。具体的には、オリエンテーションに参加した学生に対し、教室で自身の端末から回答フォームにアクセスしてもらい、その場で回答を行うというものである。調査モードの変更により、調査結果になんらかの影響をもたらす可能性は否定できないが、マークシートの読み込みエラーや誤記入の問題は原則として解消され、また調査対象者の学生の負担の軽減にもつながった²⁰。

(2) 今後の調査計画と設計

i データ分析の狙い

具体的には留学前後での GSC 版 SCAS のスコアの変化や尺度の因子構造・因果関連に変化が見られるかを検証する必要がある。なお、GSC における 2021 年時点での留学派遣先は原則としてタイおよびマレーシアのみであるが、GSC 版 SCAS の妥当性と信頼性を検証するためには当該地域以外での日本人留学生に対しても検証を行う必要がある。また、留学を経験しなかった学生との比較も必要になってくるであろう。

ii 学部カリキュラム変更の影響と調査の再設計

GSC のカリキュラムの変更に合わせて、本研究プログラムのデザインも一部再設計が必要になる可能性はある。例えば 2015 年度から 2018 年度入学者のカリキュラムまでは必修科目として設定されていた「フィールドスタディーⅠ」「フィールドスタディーⅡ」は廃止となるなどしているため、その当時の GSC の留学プログラムと現行の留学プログラム（2019 年度～）ではその効果に違いが出るであろうことが想定できる。このようなカリキュラム変更への対応を含め、定期的な調査デザインの見直しが必要であると考ええる。

iii 調査データの利用

本研究は留学効果を定量的に測定し、その学習効果実証のためのエビデンスを収集することを第一の目的としている。また、この測定結果および分析結果は、定期的に学部内にて報告の機会を設けることを想定している。実際に、これまでも、2018 年度の学部 FD 委員会にて、留学学習効果についての報告がなされている。他にも、本調査データの公益的な利用も想定されている。例えば、独立行政法人日本学生支援機構（Japan Student Services Organization、以下 JASSO）による、本学部学生の留学に対する奨学金に係るエビデンスとしての活用が挙げられる。これまでに、本留学学習効果測定の結果について言及された申請書により、2016 年度から 2019 年度まで²¹の 4 年間に渡り、本学部の留学プログラムにおける JASSO の奨学金が採択されてきた。全ての年度の申請書に、留学学習効果測定を実施しその結果を次年度プログラムに生かすことな

どが言及されている他、各年度の報告書においても、各年留学前後データの比較分析結果が報告されている。

まとめ

以上、GSC において実施されている留学効果測定の調査設計とこれまでの実際の運用について概観してきた。本調査および研究の意義は、学術的観点および運営的観点からそれぞれ以下のようにまとめられる。まず、学術的観点からは、留学学習効果測定に関する先行研究への貢献、特に日本国内でのエビデンスの貧弱性の克服と方法論の向上であり、これは本研究の最重要課題である。そして、卒業生への追跡調査や安定したデータベースの構築のような、派生する新しい研究課題への発展の可能性もある。そのため、調査項目とその内容については、定量的な比較を行うためにも原則として変更は行わないことが望ましいと考える²²。次に、運営的観点からは、教育プログラムとしての留学の効果が実際に学生に及ぼす影響をデータとして示すことにある。研究を進めるにあたって課題となったのは、留学プログラムの全体を設計するうえで、データとしての留学学習効果のフィードバック体制を整えておくことである。この点を念頭に教育カリキュラムを構想した。これにより、本研究から得られたエビデンスを、GSC の運営戦略策定やカリキュラム改革などへ反映させることも可能であろう。また、今後このプログラム評価が組織化されることで、本研究のエビデンスが、学部戦略上の意思決定へ貢献することが期待される。そのためにも、今後も長期的展望から本調査を継続的に実施する必要性を強く確信する。

参考文献

- 新井郁男 (1997) 「異文化間リテラシー育成のための教育課題」『異文化間教育』第 11 号、4-23 頁。
- 大阪商業大学 JGSS 研究センター編 (2010) 『East Asian Social Survey EASS 2008 Culture Module Codebook』大阪商業大学。
- 大阪商業大学 JGSS 研究センター編 (2010) 『日本版 General Social Surveys 基礎集計表・コー

ドブック JGSS-2018』大阪商業大学。

小林明 (2018)「高校留学のインパクト」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定』学文舎、129-155 頁。

高橋朋子・服部圭子・武知薫子・酒匂康裕 (2018)「長期交換留学における大学生の学び—韓国の大学単位取得型のカリキュラム—」『異文化間教育』第 48 号、86-101 頁。

塘利枝子 (2017)「発達心理学から見た異文化間能力—発達段階を考慮した異文化間能力のモデル化に向けて—」『異文化間教育』第 45 号、49-64 頁。

新見有紀子 (2018)「留学のインパクトに関する国内外の研究概要」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定』学文舎、29-47 頁。

花田慎吾 (2018)「留学効果分析のアプローチ～異文化適応力をテーマに～」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定』学文舎、48-67 頁。

深堀聰子 (2017)「学修の承認—海外留学することの意義を高めるための制度設計—」ウェブマガジン『留学交流』5 月号、1-13 頁。参照 https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2017/_icsFiles/afieldfile/2017/05/10/201705fukahorisatoko.pdf

平澤典男 (2018)「青山学院大学地球社会共生学部挑戦—東南アジア半期留学必須の試み—」『ウェブマガジン留学交流』2 月号、18-25 頁。参照 https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2017/_icsFiles/afieldfile/2018/02/08/201802hirasawanorio.pdf

松村真樹 (2007)「第 1 回オーストラリア短期英語研修：単位認定と海外体験学習の両立を目指して」『長崎大学留学生センター紀要』第 15 号、1-5 頁。

松尾知明・森茂岳雄・工藤和宏 (2018)「異文化間能力を生かす—実践に向けて—」『異文化間教育』第 46 号、1-15 頁。

森下佳南「米国 NPO インターンシップ評価研究：アメリカ社会でボランティア活動を行った学生の意識・行動変容と進路選択の調査」『愛知淑徳大学論集』6 号、81-97 頁。

横山和子 (2011)『国際公務員のキャリアデザイン：満足度に基づく実証分析』白桃書房。
ガウラン D.S.・西田司 (1996)『文化とコミュニケーション』八朔社。

Berg, M. V., Paige, R. M., & Lou, K. H. eds. (2012) *Student learning abroad: what our students are learning, what they're not, and what we can do about it*, Sterling, VA: Stylus Pub LLC.

Dewey, J. (1938) *Experience and education*, New York: Macmillan.

Fantini, A. E. (2009) "Assessing intercultural competence: Issues and tools," in D. K. Deardorff ed., *The SAGE handbook of intercultural competence*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications, Inc., pp.456-476.

Hammer, M. R. (2012) "The intercultural development inventory: A new frontier in assessment and development of intercultural competence," in M. V. Berg, R. M. Paige, & K. M. Lou eds., *Student learning abroad: what our students are learning, what they're not, and what we can do about it*, Sterling, VA: Stylus Pub LLC, pp.115-136.

Hanada, S. (2015) *Assessing intercultural competence: A comparative study of Japanese students*

- in study abroad programs (Doctoral Dissertation)*, University of Toronto, Toronto, Canada. Retrieved Jun. 7, 2021, from <https://tspace.library.utoronto.ca/handle/1807/80204>
- Kelley, C., & Meyers, J. (1995) *Cross-cultural adaptability inventory*, Minneapolis, MN: National Computer Systems.
- Kolb, D. A. (1984) *Experiential learning: Experience as a source of learning and development*, Prentice-Hall.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT), Japan. (2017) *About Tobitate! (Leap for Tomorrow) Study Abroad Initiative*, Tokyo, Japan. MEXT. Retrieved Jun. 7, 2021, from <https://www.tobitate.mext.go.jp/about/english.html>
- Mohler, P., Dorer, B., Jong, J. d., & Hu, M. (2016) “Translation: Overview,” in *Survey Research Center, Guidelines for best practice in cross-cultural surveys*, Survey Research Center, Institute for Social Research, University of Michigan, pp.233-377.
- Paige, R. M., & Stallman, E. M. (2007) “Using instruments in education abroad outcomes assessment,” in M. C. Bolen ed., *A guide to outcomes assessment in education abroad*, Carlisle, PA: Forum on Education Abroad, pp.137-162.
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A. (2001) *Psychology of culture shock* (2nd ed.), New York, NY: Routledge.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1999) “The measurement of sociocultural adaptation,” *International Journal of Intercultural Relations*, 23 (4), 659-677.
- Ward, C., Okura, Y., & Takahiro, K. (1998) “The U-curve on trial: A longitudinal study of psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transition,” *International Journal of Intercultural Relations*, 22 (3), 277-291.

(Endnotes)

- 1 このような日本の大学における海外留学の現状について、例えば深堀（2017）は日本政府の示している「グローバル人材像」から、日本のグローバル人材育成のための海外留学の「質」の観点の重要性を説いている。さらに、海外留学プログラムを正規の学位プログラムの中心とし、統合的にカリキュラムの設計を行うことを提唱している。
- 2 ここでの単位修得型留学とは、国内の大学に所属する学生が、留学先大学で単位を習得し、それを所属する国内の大学の単位として認定することを目的とする留学を指す。
- 3 「その他」として 3.6% (n=27) とあるが、渡航先についての言及はない。
- 4 唯一花田が混合手法を用いて実施している (Hanada 2015)。
- 5 ここで「異文化能力の育成」を挙げたのは、グローバル人材の具体的な成果として、文化的他者との効果的な協力関係の構築や対人紛争の解決能力が考えられ、そしてその中でも有効なものが「異文化能力」であるとみなしたためである。
- 6 なお、このロジックモデルは 2015 年度～2018 年度入学者の GSC カリキュラムを前

- 提にしている。
- 7 年度ごと。GSC の入学定員が 190 名のため、学年ごとの調査対象者数はおおよそ 200 名ほどである。
 - 8 2015 ～ 2018 年度入学者の GSC カリキュラムにおける制度。
 - 9 GSC の 2015 ～ 2018 年度のディプロマポリシーは、1. 一定水準の語学力に裏打ちされた十分なコミュニケーション能力、2. 主体性、積極性、協調性、リーダーシップなどのコンピテンシー、3. 自己アイデンティティを持ったうえでの異文化に対する共感力、4. 社会科学の幅広い素養のうえに築かれた明確な専門能力、5. 学院モットー「地の塩、世の光」を体現し、地球上の人々に貢献したいと思う「こころ」、を掲げている。本研究では、異文化能力にもっとも関連する最初の三項目に則り、グローバル人材を定義している。
 - 10 本来はさらに日本人サンプルへの応用が可能かどうか、確証的因子分析を用いて、心理測定上の特性を事前に確認する手順を踏む必要がある。確証的因子分析は、実際に行なっており、結果も集計済みであるが、本稿では紙幅の都合上割愛する。
 - 11 日本語版 SCAS で調査を行ったものはすでに存在するが、参照することが不可能だったため、今回の研究のために独自に日本語に翻訳する必要があった。
 - 12 SCAS の選定理由としては、1. 日本人サンプルの前例があったこと、2. 使用に関して無料であること、3. 行動様式としてのコンピテンシーに着目して作成されていること、4. 心理測定アンケートとして信頼性と妥当性が高いこと、などが挙げられる。
 - 13 難しくない (no difficulty)、あまり難しくない (slight difficulty)、そこそこ難しい (moderate difficulty)、非常に難しい (great difficulty)、極めて難しい (extreme difficulty)。
 - 14 20 名ほどの学生に協力してもらい、質問文の意図が狙い通りに伝わっているかどうかをヒアリングした。
 - 15 なお、2018 年度に調査モードをインターネット法に変更した際に自由回答項目はいったん廃止されたが、2021 年度調査より再度採用する予定である。
 - 16 語学能力については、本学部では学生に対し留学前に IELTS の受験を義務付けている他、TOEIC の受験も行っているため、それらを客観的尺度として用いることができる。本設問は語学能力の主観的側面を測定するために設定されている。
 - 17 調査実施の時期については厳密には定めていないが、原則として事前調査は留学派遣直前に行われる「出発前オリエンテーション」において、事後調査は「帰国オリエンテーション」においての実施。
 - 18 原則として各設問に対し回答は一つであるにもかかわらず多重回答を行っている、マークが不鮮明のため読み取りエラーが起きる、不誠実な回答がされている（全て同一番号の回答になっているなど）、などが散見された。また、マークシートの読み取りができる PC が大学に 1 台しか設置されておらず、不便であったことも付け加えておきたい。
 - 19 2018 年度から 2019 年度のインターネット法で採用したツールは、Microsoft の Office365 のサービスの一つである Microsoft Forms である。インターフェースについては付録を参照。

- 20 2021 年度派遣からは Google の Google Workspace が提供するサービスの一つである Google フォームを用いての実施に切り替える予定である。
- 21 2020 年度と 2021 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により留学そのものが中止となった。
- 22 ただし、留学プログラムを含めた GSC のカリキュラム変更や新たな知見が得られた場合など、調査環境が変化した場合は質問文の入れ替えやワーディングの変更などを含めた改定・改善の余地は十分にありうる。

付録 I
質問票(第1回・第2回調査)

学 生 の 留 学 に 関 す る 調 査

年 月

この調査は、青山学院大学地球社会共生学部における、留学を控えた学生の意識について調査するものです。調査票については記名ですが、分析の際は個人を特定できないようにした上で行います。

どうしても答えたくない個所は「ノーコメント」などとお書きいただいても構いませんが、多角的な分析のために、できる限りのご回答をお願いいたします。

問 1 あなたは、次にあげる国や地域出身の人が同じ大学で学ぶことについて抵抗なく受け入れることができますか、それともできませんか。以下の出身地それぞれについてお答えください。

	受け入れること ができない	あまり受け入れる ことができない	どちらとも いえない	ある程度受け入れ ることができる	受け入れること ができる	
a. 中国	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(1)
b. 韓国	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(2)
c. タイ	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(3)
d. マレーシア	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(4)
e. ヨーロッパ	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(5)
f. 北アメリカ	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(6)

問 2 あなたは、次にあげる国や地域出身の人が近所に住むことについて抵抗なく受け入れることができますか、それともできませんか。以下の出身地それぞれについてお答えください。

	受け入れること ができない	あまり受け入れる ことができない	どちらとも いえない	ある程度受け入れ ることができる	受け入れること ができる	
a. 中国	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(7)
b. 韓国	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(8)
c. タイ	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(9)
d. マレーシア	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(10)
e. ヨーロッパ	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(11)
f. 北アメリカ	---e---	---d---	---c---	---b---	a---	(12)

青山地球社会共生論集

問 3 国際問題について、家族や友人・知人と話すことは、どのくらいありますか。

a	b	c	d	e	f	g	(13)
ほぼ	週に	週に	月に	年に	年に	まったく	
毎日	数回	1回程度	1回程度	数回	1回程度	ない	

問 4 日本と他の国々との関係についてお尋ねします。次の意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。

	強く賛成	賛成	どちらかといえ ば賛成	どちらかといえ ば反対	どちらかといえ ば反対	反対	強く反対	
a. 日本経済を守るために外国製品の輸入は制限すべきだ	a---	---b---	---c---	---d---	---e---	---f---	---g	(14)
b. 他の国々に対立するとしても、日本は自国の国益を追求すべきだ	a---	---b---	---c---	---d---	---e---	---f---	---g	(15)
c. 外国の映画や音楽、本に触れる機会が増えることで、日本固有の文化が損なわれている	a---	---b---	---c---	---d---	---e---	---f---	---g	(16)

問 5 あなたは自分の生き方や生活についてどのようにお考えですか。それぞれについて、あてはまる番号を1つだけ選んで○をつけてください。

	そう思う	ややそう思う	いえない	どちらとも	そう思わない	あまり	そう思わない	
a. 他人のしあわせは素直に喜ぶほうだ	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(17)
b. 他人の悲しみに深く共感するほうだ	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(18)
c. 他人のためになるように、積極的に行動するほうだ	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(19)
d. ものごとは、それがうまくいさえすれば、正か悪かは、たいした問題ではない	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(20)
e. 実際に法を破らないかぎり、法の網をくぐってもいっこうに差し支えない	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(21)
f. 自分が困らないかぎり、好きなことを何でもやってよい	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(22)
g. 自分の実績を上げて評価されるようにいつも努力している	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(23)
h. 毎日の生活には、とてもほりがある	a---	---b---	---c---	---d---	---e			(24)

問 6 留学先での生活に関しておたずねします。次のことがらについて、現時点であなたはどの程度できると考えますか。

	難 し く な い	難 し く な い	あ ま り	難 し い	そ こ そ こ	難 し い	非 常 に	難 し い	極 め て	
a. 友達を作る	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(25)
b. 自分の意思を理解してもらう	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(26)
c. 自分を表現する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(27)
d. ジョークやユーモアを理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(28)
e. 不快な行動をとるような人に対処する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(29)
f. 権威のある地位にいる人たちに対処する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(30)
g. お役所的な応対に対処する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(31)
h. 異なった民族グループの人たちとコミュニケーションをとる	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(32)
i. 異性の人たちに共感する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(33)
j. 大学・公共機関での満足のいかないサービスに対処する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(34)
k. 物珍しげな視線に対処する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(35)
l. 現地特有のアクセント・言語を理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(36)
m. 年長の人たちに共感する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(37)
n. 社会的な地位が高い人たちに対処する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(38)
o. 何が大学で要求されているか理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(39)
p. 学業をこなす	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(40)
q. 現地の大学のスタッフと意思疎通をはかる	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(41)
r. 授業で意見を述べる	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(42)
s. 現地の政治システムを受け入れる・理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(43)
t. 現地の人たちの世界観を理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(44)
u. 現地の人たちと同じ文化的視点をもつ	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(45)
v. 現地の価値観を理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(46)
w. 現地の人たちの視点で物事をみる	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(47)
x. 「文化の違い」を理解する	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(48)
y. 異文化問題を両側面からみる	a---	---	b---	---	c---	---	d---	---	e	(49)

青山地球社会共生論集

問 7 英語でのコミュニケーション能力について、現時点であなたはどの程度できると思いますか。

	難 し く な い	難 し く な い	あ ま り	難 し い	そ こ そ こ	難 し い	非 常 に	難 し い	極 め て	
a. 英語でのリスニング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(50)
b. 英語でのスピーキング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(51)
c. 英語でのリーディング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(52)
d. 英語でのライティング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(53)

問 8 現地語（タイ語・マレー語・その他渡航先の言語）でのコミュニケーション能力について、現時点であなたはどの程度できると思いますか。

	難 し く な い	難 し く な い	あ ま り	難 し い	そ こ そ こ	難 し い	非 常 に	難 し い	極 め て	
a. 現地語でのリスニング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(54)
b. 現地語でのスピーキング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(55)
c. 現地語でのリーディング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(56)
d. 現地語でのライティング	a ---	---	b ---	---	c ---	---	d ---	---	e	(57)

ご協力ありがとうございました。今回の調査についてご意見などがありましたら、どのようなことでも結構ですので以下の空欄に記入してください。

付録Ⅱ
質問票(第3回・第4回調査)

留学効果測定調査

この調査は、青山学院大学地球社会共生学部における、留学に対する学生の意識について調査するものです。調査票については記名ですが、分析の際は個人を特定できないようにした上で行います。

調査結果はJASSOの奨学金補助を受けるための重要な資料となりますので、正確な回答をお願いいたします。

* 必須

1. あなたは、次にあげる国や地域出身の人が同じ大学で学ぶことについて抵抗なく受け入れることができますか、それともできませんか。以下の出身地それぞれについてお答えください。 *

	受け入れる ことができます	ある程度 受け入れる ことができます	どちらと もいえない	あまり受 け入れるこ とができな い	受け入れ ることがで きない
中国	☐	☐	☐	☐	☐
韓国	☐	☐	☐	☐	☐
タイ	☐	☐	☐	☐	☐
マレーシア	☐	☐	☐	☐	☐
ヨーロッパ	☐	☐	☐	☐	☐
北アメリカ	☐	☐	☐	☐	☐

2. あなたは、次にあげる国や地域出身の人が近所に住むことについて抵抗なく受け入れることができますか、それともできませんか。以下の出身地それぞれについてお答えください。 *

	受け入れる ことができ る	ある程度 受け入れる ことができ る	どちらと もいえない	あまり受 け入れるこ とができな い	受け入れ ることがで きない
中国	☐	☐	☐	☐	☐
韓国	☐	☐	☐	☐	☐
タイ	☐	☐	☐	☐	☐
マレーシア	☐	☐	☐	☐	☐
ヨーロッパ	☐	☐	☐	☐	☐
北アメリカ	☐	☐	☐	☐	☐

3. 国際問題について、家族や友人・知人と話すことは、どのくらいありますか。 *

- ☐ ほぼ毎日
- ☐ 週に数回
- ☐ 週に1回程度
- ☐ 月に1回程度
- ☐ 年に数回
- ☐ 年に1回程度
- ☐ まったくない

4. 日本と他の国々との関係についておたずねします。次の意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。 *

	強く賛成	賛成	どちらか といえば 賛成	どちらと もいえない	どちらか といえば 反対	反対	強く反対
日本経済を守るために 外国製品の輸入は制限 すべきだ	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
他の国々と対立すると しても、日本は自国の国 益を追求すべきだ	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
外国の映画や音楽、本 に触れる機会が増える ことで、日本固有の文 化が損なわれている	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐

5. あなたは自分の生き方や生活についてどのようにお考えですか。それぞれについて、あてはまるものを1つだけ選んでください。 *

	そう思う	ややそう 思う	どちらと もいえない	あまりそ う思わない	そう思わ ない
他人のしあわせは素直に喜ぶほうだ	☐	☐	☐	☐	☐
他人の悲しみに深く共感するほうだ	☐	☐	☐	☐	☐
他人のためになるように、積極的に行動するほうだ	☐	☐	☐	☐	☐
ものごとは、それがうまくいきさえすれば、正か悪かは、たいした問題ではない	☐	☐	☐	☐	☐
実際に法を破らないかぎり、法の網をくぐってもいっこうに差し支えない	☐	☐	☐	☐	☐
自分が困らないかぎり、好きなことを何でもやってよい	☐	☐	☐	☐	☐
自分の実績を上げて評価されるようにいつも努力している	☐	☐	☐	☐	☐
毎日の生活には、とてもほりがある	☐	☐	☐	☐	☐

6. 留学先での生活に関しておたずねします。次のことがらについて、現時点であなたはどの程度できると思いますか。 *

	難しくない	あまり難しい くない	そこそこ難 しい	非常に難し い	極めて難し い
友達を作る	☐	☐	☐	☐	☐
自分の意思を理解して もらう	☐	☐	☐	☐	☐
自分を表現する	☐	☐	☐	☐	☐
ジョークやユーモアを 理解する	☐	☐	☐	☐	☐
不快な行動をとるよう な人に対処する	☐	☐	☐	☐	☐
権威のある地位にある 人たちに対処する	☐	☐	☐	☐	☐
お役所的な応対に対処 する	☐	☐	☐	☐	☐
異なった民族グループ の人たちとコミュニケ ーションをとる	☐	☐	☐	☐	☐
異性の人たちに共感す る	☐	☐	☐	☐	☐
大学・公共機関での満足 のいかないサービスに 対処する	☐	☐	☐	☐	☐

7. 続けて留学先での生活に関しておたずねします。 *

	難しくない	あまり難しくない	そこそ難しい	非常に難しい	極めて難しい
物珍しげな視線に対処する	☐	☐	☐	☐	☐
現地特有のアクセント・言語を理解する	☐	☐	☐	☐	☐
年長の人たちに共感する	☐	☐	☐	☐	☐
社会的な地位が高い人たちに対処する	☐	☐	☐	☐	☐
何が大学で要求されているか理解する	☐	☐	☐	☐	☐
学業をこなす	☐	☐	☐	☐	☐
現地の大学スタッフと意思疎通をはかる	☐	☐	☐	☐	☐
授業で意見を述べる	☐	☐	☐	☐	☐
現地の政治システムを受け入れる・理解する	☐	☐	☐	☐	☐
現地の人たちの世界観を理解する	☐	☐	☐	☐	☐

8. 続けて留学先での生活に関しておたずねします。 *

	難しくない	あまり難しくない	そこそこ難しい	非常に難しい	極めて難しい
現地の人たちと同じ文化的視点を持つ	☐	☐	☐	☐	☐
現地の価値観を理解する	☐	☐	☐	☐	☐
現地の人たちの視点で物事をみる	☐	☐	☐	☐	☐
「文化の違い」を理解する	☐	☐	☐	☐	☐
異文化問題を両側面からみる	☐	☐	☐	☐	☐

9. 現地語（タイ語・マレー語・その他）でのコミュニケーション能力について、現時点であなたはどの程度できると思いますか。

現地語が英語の場合、回答は不要です。

	難しくない	あまり難しくない	そこそこ難しい	非常に難しい	極めて難しい
現地語でのリスニング	☐	☐	☐	☐	☐
現地語でのスピーキング	☐	☐	☐	☐	☐
現地語でのリーディング	☐	☐	☐	☐	☐
現地語でのライティング	☐	☐	☐	☐	☐

10. 英語でのコミュニケーション能力について、現時点であなたはどの程度でき
 と思いますか。 *

	難しくない	あまり難し くない	そこそこ難 しい	非常に難し い	極めて難し い
英語でのリスニング	☐	☐	☐	☐	☐
英語でのスピーキング	☐	☐	☐	☐	☐
英語でのリーディング	☐	☐	☐	☐	☐
英語でのライティング	☐	☐	☐	☐	☐